

## 各セクションの報告・情報

## THE: 現場

## たまり場ぱれっと

## ～劇団レインボー・公開リハーサル～

たまり場ぱれっと、クラブ活動のひとつ「劇団レインボー」は、毎月2回、土曜日に集まって練習しています。2019年の暮れにスタート、すぐにコロナ禍になり、約2年間満足に活動ができなかった時期を経て、ようやく昨年2月に旗揚げ公演を行なうことができました。コロナ禍のため、接触自粛、マスク着用など様々な制限のある中での公演で、朗読劇という形ではありましたが、メンバーは皆初めての舞台とは思えないほどの堂々たる演技を披露しました。

## ●今取り組んでいる作品

その後コロナ禍も解け、今度は動きのある舞台を、という想いのもと、座長の渡辺藍子さんが、プロの劇団「ヨロタミ」さんから台本をお借りして、「パネルの裏から」という作品に挑戦しています。約30分ほどの作品ですが、動きもあり、できる人は台本を見ずにセリフを言うなどかなりのチャレンジ要素を含んだ内容となっています。この作品は今年の夏ぐらいから本格的に取り組み始めましたが、最初は声も小さく、動きもぎこちないものでした。しかし、毎回練習で「あめんぼ あかいな あいうえお!!」と皆で発声練習をすることで、声の大きさ、セリフの「キレ」などが鍛えられています。また、今年3月にはヨロタミさんからプロの役者に来ていただき、直接指導を受けて自信もつてきました。

## ●9月23日

そして9月23日(月)、これまでの練習の成果を、主にご家族や近しい関係者にお見せする公開リハーサルを開催しました。当日は緊張のあまり気分が悪くなる人がいたり、舞台の上で失って動かないという設定ながら、作品の進行が気になってごそごそと台本を見てしまったりと様々なエピソードが生まれましたが、途中ストップすることなく皆最後まで演じきりました。「緊張したけど気持ち良かった」「スポットライトを浴びたのがうれしい」「観に来た人に『良かったよ』と言ってもらえてうれしかった」という感想に加え、「本番では台本を見ずにセリフを言えるようになりたい」「もっとたくさんの人に観に来てほしい」「動きをもっとかっこよくしたい」など、前向きな声が聞かれました。



「公開リハーサルの様子」

## ●本番へ向けて

立ち上げ時、数名だった劇団は、現在23名の大所帯になりました。舞台上がる役者だけではなく、音響、照明などの裏方も含めてまとまりも出てきました。今回はごく近しい関係者のみへのお声かけとなりましたが、劇団メンバーにとって、とても良い経験になったと思います。本番は来年2月を予定しています。ぜひ皆さんで足を運んでいただけたらと思います。(みなみやま)

## おかし屋ぱれっと

ちゅうもん  
～たくさんの注文!  
みんなで乗り越えよう!～

おかし屋では、今年から新たに販売会を実施させていただける場所が増え、ある企業様では一日で25万円ほどの売上にもなりました。企業様のみならず地域の中で、地元の人や街行くひとたちと交流しながら行なう販売会も増えてきています。また、文化の秋を迎え、様々な学校様から文化祭用の商品の注文が増えてきています。「昨年好評だったので、今年はより多く注文したいです!」といった問い合わせがとて多く、メンバー・職員一同喜んでいきます。製造量の多い日はメンバーも残業となることがあり、「大変だ～」とびっくりした様子の人もいれば「たくさん注文があってお金(=工賃)がいっぱい貰えるね」「たくさんの人に喜んで貰えてるね」と忙しくなることが嬉しい人もいます。みんなで協力して繁忙期を乗り越えていこうと、声を掛け合って日々一所懸命に作業をしています。(いのうえ)

## ぱれっとホーム

にゅうきよしやどうし こうりゆう  
～入居者同士の交流～

・とある週末を楽しみにしていたIさん。聞くと他の入居者さんと待ち合わせをして近くの学校の文化祭へ遊びに行く約束をしたのだとか。どこで待ち合わせて、どこで昼食を食べて…とお話する表情からも、心から楽しみにしている気持ちが窺えました。

・Oさんは夕食後、いつもホームスタッフと口腔体操に励んでいます。取り組んでから約1年たつ現在では、最初は小さかった発声も力強い日が増えました。ご本人の努力はもちろん、「今日はすごく声出てるね」と声をかけてくれたり、一緒に口腔体操に参加したりと、スタッフと共に見守ってきてくれた他の入居者さん達もいたことも、大きな理由のひとつではないでしょうか。

縁あって同じ屋根の下で暮らし、和やかな交流をはぐくむ入居者さんたちのエピソードを、ほんの一部ですが書かせてもらいました。けんかもしますけどね!(やまき)

## ぱれっとインターナショナル・ジャパン

～ケニアのモヨ・チルドレン・センター～

ケニアのモヨ・チルドレン・センター、佐藤南帆代表から今年も「ナイロビチャリティマラソン」への支援のお願いが届きました。モヨ・チルドレン・センターは貧困問題を抱えたり、虐待を受ける現地の子どもたちを救うために生活の場を提供、さらに教育や就労の支援も行なっています。最近届いた現地のレポートからは、順風満帆とはいかない様子がひしひしと伝わってきます。仕事も見つかり、「これで大丈夫」と思ってもちょっとしたつまづきでまた元の状況に戻ってしまう子どもたち。その苦悩は日本にいる私たちには想像できません。少しでも現地の子どもたちの笑顔が広がるよう、今年も協力します。(みなみやま)